

大阪湾の今

大阪湾再生推進会議による「大阪湾再生推進行動計画」2019 に、写真の大阪湾における埋立の変遷が載っていた。大阪の湾岸部に関心があり、埋立による土地造成の歴史に注目した。

とりわけ現在の大阪市・尼崎市は、江戸時代の埋立がかなり多い。明治から昭和20年までの戦前は、大阪市・神戸市、そして今に至る戦後は大阪湾一帯に埋立が広がっている。

大阪湾の水環境の現状について、地形と海水の汚濁などを次のように説明している。

大阪湾沿岸の地形は、背後圏の経済活動の発展などに伴って大きく変化しました。

この結果、昭和初期頃までには広く分布していた浅い海域や自然海岸は大幅に減少し、住民・市民が海と触れ合うことのできる親水空間や海の生物の生育に重要な干潟や藻場が失われてきました。干潟、藻場等を含む水深10m以浅の浅場面積は、昭和7年から平成5年までに240 km²から117 km²まで大幅に減少しました。

なお、大阪湾に流入する河川のうち、淀川・神崎川・武庫川・大和川など流量の大きい河川は湾奥部に集中しています。

大阪湾は、背後に多くの人口や産業が集積している閉鎖性海域であるため、陸から流れ込む汚れの量が多いことに加え、海に流れ込んだ汚れが溜まりやすい状況にあります。

このため、大阪湾は富栄養化の状態にあり、赤潮の発生や、夏季には海水中の酸素が極端に少ない「貧酸素水塊」の発生がみられます。赤潮や貧酸素水塊は、湾奥部を中心に発生し、生物の生息に影響を及ぼしています。また、昭和50年頃から貝類の漁獲量は激減しています。

変遷図の「平成27年11月1日現在 埋立許可を受けているもの」のなかに、夢洲がある。先日、その夢洲に上陸して視察したが、粉塵などに悩まされながら、生物多様性の「ホットスポット」であることも確認できた。こうした大阪湾の埋立が、海水の汚濁と生物、大阪湾再生にどのような影響をあたえてきたのか、検証と評価が求められる。

(2019年5月18日)

